

No.10 メナシェ・カディシュマン

Menashe Kadishman

「自然は微笑まず、人は微笑む」

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 4 月 15 日付 立川市市報記事より

カディシュマンは、ペDESTリアンデッキの幅 10 メートルの擁壁に鉄のレリーフの作品をつくった。そこには、日本語、英語、ヘブライ語で「自然は微笑まず、人は微笑む」という言葉が彫られ、羊が丘の上で草を食んでいる。レリーフの後ろにはテープライトが埋め込まれ、夜はカットアウトされた部分から明かりがもれてシルエットが浮かび上がる。

彼の作品には羊がよく出てくるが、かつて羊飼いであった彼にとって、羊は人間と自然をつなぐ存在であるとともに、人間の傍らにあって、その悲劇を見てきた友達でもある。彼はユダヤ人で、アラブとイスラエルの戦争と背中あわせで生きてきた。しかし彼の作品には、そうした民族の歴史を超えた、人間の普遍的運命に対する深い悲しみが感じられるのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

アートフロントギャラリーの北川さんから立川プロジェクトの話聞いたのは、在京イスラエル大使館の文化アタッシュエであるイテディット・アミハイ女史と一緒に彼を訪ねた時のことでした。

歴史が建設よりもはるかに多くの破壊を物語っていることは、人々の知るところです。

歴史における”偉人”は非常にしばしば、偉大な破壊者でありました。

彼らが偉大なる破壊者であったことは極めてまれなことです。しかし破壊は憎悪であり、建設は愛を意味します。

北川フラムは、この繊細で謙虚な人物は、建設者であります。

私を魅了する数ある日本の事物の一つに、自然に対する日本人固有の関わり方、姿勢があります。

たとえば寺に入ると、そこには完全に人間化された庭があります。

池、その隅にある木の位置、水面に反射する角度、なだらかな小丘、島、色一すべが人間の思考と感情を伝えています。

果たして、私の作品を見て、自然が内化されたこの美しい場所を生み出した人々は微笑んでくれるでしょうか。

以前、立川プロジェクトのための自身の彫刻について私がこう書いたように：“自然は笑わず、人々は笑う”と。